

## 幼児期の環境教育の契機としての環境絵本の分析

### Analysis of the environmental picture books as teaching opportunities concerning environmental education in the early childhood

今村光章

IMAMURA Mitsuyuki

キーワード：絵本，環境教育，幼児期，家庭教育

#### 1. はじめに

絵本のなかには，幼児期や学童期における環境教育（environmental education）の教材として大きな可能性を秘めているものが多々ある。とりわけ，1990年代以降に制作された自然と環境を題材とした絵本である「環境絵本（environmental picture book）」は，環境教育のために制作されているという点でその意義は大きい。本稿では，そのような環境絵本の制作過程とその内容の分析を通じて，幼児期の環境教育を切り拓く環境絵本の意義に言及したい。

さて，環境教育の登場以来というもの，このような教育は生涯にわたるものであり，とりわけ幼児期は他の時期にない重要な役割を担っていると言われてきた。

しかしながら，井上美智子が，1990年から2003年までに出版された幼児期の環境教育についての文献をすべて調べ上げるといふ力作の総説論文で，「現在までに幼児期の環境教育の実践がなかったわけではない<sup>1)</sup>」と示唆するように，幼児期の環境教育の動きはやや鈍いといわざるを得ない。

このように，本稿において，幼児期の環境教育の教材としての絵本分析といった研究に着手するのは，幼児期における環境教育と家庭における環境教育が見過ごされがちであるという背景がある。

さらに言えば，幼児期においては，保育所や幼稚園といった就学前教育機関の場での教育活動の

重要性もさることながら，家庭という教育の場の重要性も指摘されている。ところが，家庭における環境教育の重要性はたまに指摘こそされるが，これまで本格的にとりあげられることは極めてわずかであった。

1990年から創設された日本環境教育学会の学会誌においても家庭における環境教育に関する本格的な先行研究は皆無である。また，環境教育と「幼児」・「保育」・「就学前」をキーワードにして，書籍，学術雑誌等に掲載された環境教育関連論文を洗い出してみても，その内容として家庭での環境教育を正面から本格的に扱ったものは管見の限り見当たらない。つまり，学校，地域，家庭という三つの教育の場があると言われながら，環境教育の領域においては家庭教育の場は看過されているようである。

以上のように，環境教育においては幼児期という時期も家庭教育という場も見過ごされがちであった。言い換えれば，家庭教育における幼児対象の環境教育活動の意義はほとんど無視されてきたといっても言い過ぎではないだろう。しかしながら，絵本はそうした家庭での環境教育の可能性を拓く契機となりうるものと考えられる。こうした観点から，本稿では環境絵本を紹介するとともにその意義について言及したい。

ところで，詳細については後述するとしても，環境絵本には二つの種類がある点についてはここで簡単に言及しておかなければなるまい。ひとつは「既存型環境絵本」で，もうひとつは「理念型環境絵本」である。

「既存型環境絵本」とは，絵本の制作者がまったくといっていいほど環境教育的な意図を有して

いない絵本である。それにもかかわらず、読み手が環境教育的な要素をもつ絵本であると理解できる絵本である。たとえば、『もこ もこもこ』や『花さき山』などがそれである。こうした絵本は必ずしも制作者が環境教育を意図しているわけではないが、読み方によっては環境教育的要素が入り込んでいるので、環境絵本であるともいえるが、それについては別のところで取り扱ったのでここでは詳述しない<sup>4)</sup>。

他方では、意図的・計画的に環境教育のために用いることを前提として制作された絵本がある。本稿でとりあげたいのはそのような絵本である。そのような絵本は、環境教育という理念が先にあるために製作された絵本であるので「理想型環境絵本」といってもいいだろう。本稿ではそのような名称を用いる。

本稿では、制作者が環境教育の教材として用いることを念頭においている絵本である「理想型環境絵本」の内容と制作過程を順次検討していきたい。まずはそうした絵本が存在することを紹介したい。それが本論文の第一の意義である。

また、制作過程と内容の紹介をする際、あくまでも物語や絵本独自がもつ教材としての意味内容を考察することが重要であると考えたため、絵については言及を避けた。それは今後の課題とした。現段階では、環境絵本を契機とした環境に関するコミュニケーションが存在することを自覚したり、それを増幅することにつなげたりすることのほうがより重要であるように考えられる。

このような観点から「理想型環境絵本」の特徴を踏まえつつ、それが環境教育に対してどのような意義を有しているのかについて考察していきたい。

## 2 「おばけのもーりーとまーち」 制作過程も環境教育

### 2-1 絵本の制作過程

最初に、1998年に、地方公共団体が企画した環境絵本としてもっとも早い段階で出版された絵本を取り上げたい。茨城県生活環境部環境政策課が出した環境絵本『おばけのもーりーとまーち 森からのこえがきこえる?』<sup>5)</sup>である。

1998年5月7日付けの茨城県知事記者会見資料によれば、幼児の時から環境に配慮した生活習慣を身につけさせることが大切であるので、本格的

な環境絵本を全国で初めて制作したとされている。その狙いは「人間は、自然や都市や動物や植物など、さまざまなつながりの中で生きていることを感じてもらいたい」というところにあるという。そして、自然(森)と人間(街)はつながっていることを理解でき、幼児にとって、楽しみをもって見ることができるよう配慮し、しかも、茨城県から全国の幼児に向けて発信することを狙ったという。

この絵本の制作過程では、総勢15名の制作チームが編成され、幼稚園教諭や保育士の参加も仰ぎ5歳児に絵本を読み聞かせながらすすめられた。その結果、絵本部分が4色刷り32頁、解説部分が単色刷り8頁のA4判で総頁数40頁の環境絵本が出来上がった。

絵本頁では、幼児が感覚的に共感でき、しかも人間と環境とのつながりを理解しやすいように工夫されている。また、8頁にも及ぶ大人向けの解説頁では、環境保全への理解と実践的な行動への動機づけができるようにまとめている。

普通の絵本ならば、こうした長文の解説部分はあまり見かけないが、読み語りをする両親や幼稚園教諭、保育士などが理解を深めるように工夫されている。そのほかの「理想型環境絵本」にも共通する特徴である。

また、茨城県の多様な自然を知ってもらうことを狙いとして、身近な環境への関心を高めてもらいたいと考え、「いばらき自然環境フォトコンテスト」の入選作品を使用しており、巻末には「自然とふれあえる県内の施設ガイド」を収録している。親に対する環境教育的要素も含まれているので、普通の絵本とはかなり趣向が異なった本である。

すでに40000部を印刷して、一般の書店で配布するばかりではなく県内の幼児教育関係機関に配布したという。多くの子どもたちがこの絵本を目にしていることは間違いがないだろう。

この絵本の制作過程を概観すれば、それがすでに大人たちにとっての環境教育のプロセスであることが理解できる。しかも、驚くほどたくさんの人々がそれにかかわりあっていることにも、環境教育の普及をみることができ、「理想型環境絵本」はその制作過程も環境教育(学習)の過程であるのだ。

## 2 - 2 絵本の内容と分析

それでは、そのストーリーを簡単に紹介しておこう。

主人公は、森のおばけである「モーリー」と街のおばけである「まーち」である。幼児にとっては、両者は親しみやすいキャラクターであり、大人にとっては忘れかけていた自然を思い出すきっかけとなるように工夫されている。

「まーち」は「モーリー」に、街には便利な道具があり、車やビルが立ち並んでおり、夜も明るいという自慢する。要するに、現代社会の豊かで便利な消費生活をまるごと映し出し肯定する。

一方、「モーリー」は、森のすばらしさを語る。その話に惹かれて「まーち」はまず森に出かけ、鷹が死んで森や草の栄養となって土の中に還っていくという自然の循環の仕組みを知る。同時に、森や湖がすべてのいのちとつながっていることを知る。このように循環や自然の仕組みを分かりやすく説明している。

後半では、「モーリー」が「まーち」と連れ立って街へ出かける。ところが、「モーリー」は街の汚れた空気と水に閉口する。そのとき突然、風のおばけが現われて二人を森まで吹き飛ばしてしまう。吹き飛ばされて森に戻ったふたりは、そこでリサイクルの大切さを語りあう。

風に吹き飛ばされて、街の息苦しさからあっという間に解放されるところがやや唐突なのだが、そのような風が意味するのは自然からの「しっぺ返し」でもあると解釈できる。

ところで、この環境絵本の監修者である日本環境教育フォーラム常務理事でオーク・ヴィレッジ代表の稲本正は、この絵本のあとがきで部分の「わかった」と題されるエッセイで次のように述べている。この環境絵本の趣旨がよくわかる文章であるので引用しておこう。

「目に見えるもの、耳に聞こえる音、手や足でふれる感触、舌で感じられる味。そういう五感で受け止めることで、具体的な何かがある。しかし、それとは別に、ものの仕組みとか、関係といった状態を把握するもう一つのわかり方もある。環境のことをわかるには、この両方のわかり方が必要だ。」<sup>6)</sup>

たしかに、こうした環境絵本では、感覚によっても理性によってもない、物語的な世界での

「もう一つのわかり方」で、知らないうちに自然の仕組みや街と森の関係に人々が気づいていくことができる。

稲本氏の言うように、私たちにとって、まず自然の営みや不思議さを実際に感じてみるのがすべてのはじまりとなる。森や川に出かけて「感じる」体験を重ね、他の命とのつながりが生まれていくことがなんとなくわかったときに、こうした絵本の説明におもわず「わかった」と言える時がくるのであろう。

そういった合理的な説明ができない「わかった」を紡ぎあわせていけば、環境教育が総合的かつ体系的なものとなっていくようにも思われる。総じて言えば、自然に関する 感覚的理解や 理性的理解以外にも、 物語的な理解があることが指摘されていると言えよう。

## 3 「ガムッチおうじとどんぐりのき」自然からの「しっぺ返し」を学ぶ本

### 3 - 1 絵本の制作過程とその狙い

2002年3月に発行された、『しぜんをまもる やさしいこころ ガムッチおうじとどんぐりのき』<sup>7)</sup>は、絵本のカバーの裏(扉)に「啓発用環境絵本」と書かれた典型的な環境絵本である。

地方公共団体だけではなく、他団体との協同制作によって作られており、『おばけのモーリーとまーち』と同様に、制作過程そのものが環境教育のプロセスであるといえる絵本である。市民や行政関係者、幼稚園教諭など多くの人々がこの絵本の制作にかかわっている。

さて、その狙いであるが、カバーの裏扉にある「啓発用環境絵本の発刊にあたって」と題された文章には、次のように書かれている。長野県生活環境部の環境および環境問題に関する啓発という制作の狙いが非常によくわかる文章であるので引用しておきたい。

「ごみの問題から、公害問題、自然保護、さらには地球温暖化の防止まで、環境をとりまく様々な問題に対しては、あらゆる世代を通じて、県民一人ひとり全ての方が、環境に対する意識を持って取り組んでいくことが求められています。 中略 命の大切さ、お互いを思いやる気持ち、やさしい心、そして私たちが暮らす地球を愛するというような 様々な想いを読者の方に感じていただき、

環境に対する意識がさらに芽生え、大きく育つことを願っています」

また、この絵本の使いかたについては、同生活環境部によれば、対象は幼稚園児・保育所の園児と小学校低学年児童であり、初版(2002年3月)は、長野県内の幼稚園、保育所、小学校、図書館などに計1,200部が配布され、第二刷(2003年3月)は、同県内の公民館、児童館、病院・診療所(小児科)などに計1,000部が配布されたという。残念なことに、一般には販売されていない。だが、こうした絵本が実際に子どもたちの目に触れるところにあることは間違いない。

### 3-2 絵本の内容と分析

この絵本のあらすじは次のとおりである。

わがままで有名なガムッチおうじが、召し使いを従え、森の中にあるナッツお婆さんの主催する子どもたち向けのお絵かき教室にやってくる。他の子どもたちみんなが教室でお絵かきをする中、ガムッチおうじは、外でお絵かきをするとわがまを言い出した。外に出てからも、ガムッチおうじはわがまま放題で、自分が前に進むのに邪魔になるものを全て取り除こうとする。岩があれば隣の花壇をつぶしてでも岩をどかしたり、小川があればそれを埋めて前に進もうとする。

さらに進むと、おうじの目の前に、大きなどんぐりの木が現れるが、おうじはこの木を無理やり切ろうとする。ナッツお婆さんは、「木を切らないで！」とおうじに願います。それでも、おうじは聞き入れず、召し使いに木を切るよう命令する。

その瞬間、ものすごい風が吹き荒れ、どんぐりの木が激しく揺れ、雷が落ち、おうじは気を失う。目が覚めたおうじは自分が悪かったと謝ることになる。最後に、ナッツお婆さんは、「どんぐりのきをそだてましょう。しぜんはみんなでももらないとね」と言い、おうじもそれ以来わがまを言わなくなる。

まず、この絵本は、おうじのわがまな行為が現代産業社会の私たち人間の欲望から生まれることを風刺していると解釈できる。おうじのカバンと旗を持った二人の召し使いは、おうじの命令に従っている。それぞれ一方のカバンは所有への欲望に見え、他方の旗は、個人の私利私欲を優先するイデオロギーの象徴に見立てられる。モノを所有し、旗印を掲げて進むおうじは、意識的に描かれてい

るかどうかはさておくとしても、すでに現代人の姿そのものである。

もっとも、おうじが背の低い小さな子どもの姿で描かれていることが気にいらぬという読者がいることは容易に想像できる。それは本当は大人だからだ。ただ、子ども向けなので主人公を子どもらしく描いているのであろう。親子がこの絵本を契機に環境に関する会話をするとすれば、これは現代の大人の姿であると親は気付くだろう。そのときのコミュニケーションが重要であるので描かれかたについてはこれ以上言及しない。

大人たちがこの絵本を読めば、現代の消費生活に慣れきっている私たちが「慣性の法則」であるかのように、産業社会の体制に盲目的に追従していることに気づかずにはおれない。おうじの召し使いたちは、おうじの命令に従って石を取り除いたり川を堰き止めたり、木を切ったりする「技術」を有してもいる。大人が読み解けば、おうじとその召し使いに象徴されるのは、所有欲と快樂主義、そしてテクノロジーなのである。

最後のシーンでは、召し使いたちは消えている。そして、森の生活者であるナッツお婆さんが再登場してお絵かき教室を再開する。荷物も旗もない。こうした最後の象徴的なシーンが環境絵本にあることから、持続可能な社会の状況についてさまざまなことを想起することができる。

ところで、生命あるどんぐりの木を切ろうとするおうじに、ナッツお婆さんは、「きには とりたちの おうちがあります 中略 どんぐりの みは もりの みんなの たいせつな たべものなのです」と教えて、木を切ることに反対する。

このナッツお婆さんとは一体何者なのだろうか。動物を含めて「もりのみんな」などと表現するが、誰しもがこうした言葉をつぶやけるのだろうか。彼女は学校教育でいうところの「環境教育者」なのだろうか。いったい彼女はどこからやってくるのだろうか。そうした疑問が沸き起こらざるを得ない。

彼女は森の中の一軒家でお絵かき教室を開いていたことになっているが、それは都市生活者とは異なる生活をして自然に親しんでいたという人物であろうか。森の生活者ソローをも想起させる人物であるが、いずれにせよ、市民や大人たちではなく、彼女が自然の代弁者として木の大切さを語

るのである。

彼女が誰であるかはともかくとして、このような疑問をもつ点から、昔は原初的な意味での「環境教育者」が存在したことに気付かされる。現在の理念先行型環境教育の指導者 その多くが教員なのだが とは異なり、「既存型環境教育者」とでも呼ぶべき人物が市井に存在したはずだが、そのような人間が消失してしまったことに気づかされる。

環境絵本では、現実には存在しないような世俗外個人を登場させて、環境教育を進めるという方法をとることがある。それは、そうした人物でなければ教えられないような領域があるからではないだろうか。

さて、最後にこの絵本では、前出の『おばけのもーりーとまーち』でも同じように風が吹き荒れるのだが、この絵本での風や雷は何を意味するのかを考えてみたい。おそらくそれらは自然の怒りや「しっぺ返し」なのである。私たちは、風神雷神や「八百万の神」というように、自然の中に神様がいることを知っている。そして、その神の怒りに触れないようにしなければならないということも知っている。環境絵本の制作者はそれを理解して、幸福な終末を迎えるための控えめな不幸な契機をストーリーに忍び込ませているのだ。そのような自然の怖さを盛り込んでいるのが環境絵本である。

蛇足ながら、私は、ある外国人の環境教育の研究者と私的な会話をしていたときに、「環境教育を根本的に変化させるものは何か？」という私の問に、「大災害（Big Disaster）だ！」といわれてショックを受けたことがある。だが、彼は続けた。「チェルノブイリの大惨事でも人間は目覚めなかったのだから、地球の人口の半分ぐらいが死滅するような出来事でないとむずかしいかも」と。それほど悲惨な事件が起こることは、誰も決して望んではいないが、物語のなかで、自然からの「しっぺ返し」として、ほどほどの不幸な出来事が起こるのは、教育的効果としては面白い仕掛けかもしれない

ただし、「しっぺ返し」と言う「毒」は良薬になるとはいえ、「しっぺ返し」が怖いという理由だけで、環境配慮型の行動をすとなれば、それにも問題が残る。

この絵本では、欲望のままに自然を破壊する人

間が風刺されており、しかも、「しっぺ返し」の体験による教育（学習）の可能性と変化の可能性について描かれている。繰り返すが、こうした物語を踏まえたうえで、大人と子どもとの環境にかかわるコミュニケーションによって、環境絵本の意味づけがなされなければならないように考えられる。

以上のように、本節でとりあげた「理念型環境絵本」の特徴として、現代社会の風刺をしている点、世俗外個人である環境教育者が登場する点、自然からのしっぺ返しが描かれている点が挙げられる。

#### 4 「もりのおくりもの」 自然からの贈与物の分配とその返礼

##### 4 - 1 絵本の制作過程

次に、地方公共団体・企業・絵本作家の共同による環境絵本の紹介をしておこう。

むらたゆみさんは、富山県新湊市在住の絵本作家である。毎年、富山県大島町の絵本館で開催されている「全国手づくり絵本コンクール」で何度も受賞されている。そのなかで、第5回井口文秀賞（最優秀賞）を受賞した絵本『もりのおくりもの』<sup>8)</sup>が、2000年に北陸電力株式会社の企画・製作によって出版されている。

北陸電力とむらたゆみさんと絵本館の三者の協力によって、どんぐりを題材にしたこの環境絵本が発刊されたことは注目すべきことである。とりわけ、企業が加わっているところが興味深い。企業集団は利益追求を本来的な目的とする。電力会社という公益性が高い企業とはいえ、こうした環境保全や環境絵本の製作に尽力しようとするところに、企業の体質の変化を看取できる。企業が利潤を得た社会に返礼をしているとも考えられる。

さて、北陸電力の説明によれば、同社は地域の人々との連携を図りながら、環境保全に関するさまざまなアプローチを展開しており、一人ひとりが地球環境を守らなくてはならないという意識を育むため、身近な活動を行っていると言っている。また、子どもたちに環境と森林とのかかわりを学んでもらうため、富山県・石川県・福井県で2000本あまりのどんぐりの木を植樹して啓発活動を行っている。同社によれば、この環境絵本の初版の6,000部を書店およびインターネット上で販

売したほか、一部は北陸3県の図書館と児童館(約310箇所)へ寄贈したという。かなりの部数が多い人の目にとまるところにある。

#### 4-2 絵本の内容：自然からの贈与物の分配と自然への返礼

ストーリーは、非常に簡単である。子どもが森でどんぐりを拾い、それを森に返しに行くという話である。

主人公である幼稚園児のはるかは遠足でどんぐりとどんぐりの木を発見し、どんぐりを拾って自宅に戻る。家ではペットのチャベネコとどんぐりのおもちゃを作って遊ぶ。自然の恵みのどんぐりで玩具を作るわけである。それをネコがみているところがユーモラスであるが、ネコの登場は、どんぐりが人間のものだけでないことを知るための伏線でもある。

はるかの母は、どんぐりのなかにいる「どんぐりむし」を発見して驚く。父の説明で、そのむしがゾウムシの幼虫とわかる。どんぐりは人間とかわっているだけではないことを知るのである。

図鑑を持ってきた父は、どんぐりがカケスやクマ、リス、ゾウムシ、ネズミのエサになっていることを教える。そうした動物たちは、秋にどんぐりをたくさん食べて土の中に隠しておくことを知り、はるかは動物たちの冬の食べ物を奪い去ったのではないかという罪悪感を抱く。

そこで、はるかは両親と共に森へ出かけていき、動物たちのエサとなるようにどんぐりを土の中に埋める。父は、動物たちが食べきれなかったどんぐりがいつか土のなかから芽を出して、大きなどんぐりになることを説明する。

最後に、春になって、どんぐりの芽を発見したはるかに、父親が、この木が大きくなったらはるかにイスを作ってあげると約束する。

森からうけた贈与物、つまり自然の恵みを動物たちと共有して、しかも、返礼しようという物語である。自然からの恵み動植物と分配するのも、自然に返す(交換する)のもまた人間の役割である。そのことを教えてくれる絵本である。自然から一方的な搾取ばかりをする現代社会において、どんぐりを返しに行くというストーリーは理念型環境教育に欠けていた感覚を思い出させるのではないだろうか。

付言しておけば、科学的知識を導入しようとして図鑑が登場するところにも着目しておきたい。

たとえば、カケスはのど袋にどんぐりをいれて運ぶが、隠した場所を忘れてしまうなどユーモラスな姿が紹介される。動物たちの生態を知ることによって、はるかの行動が変化していく。自然や環境問題に関する知識が行動変容を生むことを示唆しているのである。この点も興味深い。

## 5 その他の環境絵本

環境容量、持続可能な消費、自然に対する労働のすばらしさを示唆する絵本

### 5-1 環境容量を教える『大きな玉子』

自費出版してまで環境絵本を作ろうという情熱のある人々もいる。次に一般の市民が自費出版した絵本を二冊だけ紹介しておこう。

『大きな玉子』<sup>9)</sup>は、大阪の主婦である谷口寿美子がプロデュースした自費出版の本である。ストーリーは単純である。昔、大きな玉子の中から動物と人間がやってきたという想定ではじまる。しかし、動物たちは、自然を破壊する人間に嫌気がさして、地球からでていこうとする。動物たち自身がもう一度、大きな玉子を作ろうとするのだが、今度は人間をのせないという。人間たちは、動物たちとの間で交わした自然を大切にしようというルールを自分たちの都合のいいように変えてしまったから、今度は動物たちが人間を見捨てるというのである。

物語の中で象徴的なシーンがある。動物たちと人間が玉子のなかから出てきたとき、人間自身が動物たちに向かって「この星は大きくて食べ物もたくさんありますしきれいな水もたくさんあります。だけど食べ物や水を自分が食べられる以上はよくばって集めないでください」と注意するシーンである。つまり、たまごという限られた空間の表現で、環境容量のことを示唆するとともに、人間の欲望制御のことについてシンプルに語っているとも解釈できる。

### 5-2 持続可能な消費を教える『じーじのおはなし』

『じーじのおはなし』<sup>10)</sup>も自費出版の絵本だが、「大切な森」、「みんなおなじ地球人」など一話完結の物語が11話おさめられた小絵本集である。森の役割について話し合うことや、木や水の大切さを忘れないようにというメッセージが「あとがき」に書かれている。持続可能な消費の概念について教えてくれる。

これらは市民の目と手で作られたということに特徴があるが、持続可能な消費の概念や環境容量を示唆的に示している点がおもしろい。また、自費出版の絵本でなくても、こうした環境倫理学の基本的な内容を示す環境絵本がたくさん存在している。

さらに言えば、環境絵本の制作者は深い知の冒険をしているとも言える。愛知万博やANA（全日空）が主催する環境絵本のコンクールが開催されているが、その応募過程もまた魅力的な環境教育の過程である。親が自分の子どものためだけの環境絵本を作ることも素敵な環境教育活動のひとつなのである。

### 5 - 3 自然に対する労働の素晴らしさを示唆する『じいちゃんとぼくの海』

1992年に、海の環境問題をどう教えるかを考えることを狙いとして書かれた『じいちゃんとぼくの海』<sup>11)</sup>が出版されている。落ち着いた写実的な絵で、自然とのかかわり方を教えてくれるすばらしい絵本である。おそらく環境教育の最も古いタイプのものである。最後にこの絵本に言及したい。

この絵本の前半部分では、魚とりの名人のじいちゃんが、汚れた海と魚が獲れなくなった海を嘆き、父親が海で働くのをやめて工場へ働きに出るというストーリーが語られる。環境問題の深刻化と漁業不振を指摘している絵本である。

あるとき、じいちゃんはなかなか海から帰ってこず、家族は心配する。しかし、じいちゃんは大きなタイをかかえて船から下りてくる。心配していた主人公の「ぼく」は、「ぼくも おおきくなったら さかなをとる。」と言って、じいちゃんの手をぎゅっと握る。そうすると、じいちゃんも、「そうとも。おまえも りょうしの まごだ。海を だいに しなくちゃな。」と言って唇をかむ。そうした決意表明のシーンで締めくくられている。

この環境絵本には、2頁にわたって、「先生やおうちのかたへ」という解説の頁が付されている。そこでは、海はいのちの源であり、大切にしなければならないというメッセージと、学校でも家庭でも、子どもにそのことを教えてくださいというきわめて直接的なメッセージがある。環境絵本の大きな特徴のひとつなのだが、その多くには大人向けの解説頁や充実した「あとがき」が付されており、環境配慮の実践活動を促そうとするメッ

セージ性が発見できる。

昨今のサラリーマン家庭では、自然に対する労働と自然の恵みを受け取ることのすばらしさがなかなか実感できない。だからこそ絵本を借りてそうしたことを伝えようとしていると解釈できる。ただ、この絵本の真の評価は、ほとんどの環境絵本がそうであるように、読み語り手である大人（親・保育者）と子どもが、この絵本を媒体としてどのようなコミュニケーションをはかるかによって大きく左右されることは間違いがない。

## 6 環境絵本の意義 絵本制作と家庭での既存型環境教育

### 6 1 環境絵本それ自体の魅力：環境に関するコミュニケーションを刺激する点

では、こうした「環境絵本」 環境絵本全体を含めてだが、 の意義はどこにあるのだろうか。

そのひとつは、幼児対象の環境教育の教材として環境絵本は有益で、まずはその契機となる可能性が大きいという点である。家庭教育においても就学前教育機関においても、こうした環境絵本は有効に活用できるであろう。子どもたちは、環境絵本のなかで深い知の冒険を試みているといえよう。

子どもは、環境教育を意識した環境絵本というメディアを通して、自然や環境との関係を間接的に幅広く学び、どのように付き合うかも学んでいる。環境絵本は幼児が人生で初めて出会う環境教育のテキストである。そのような環境絵本の解釈に保育者（両親や幼稚園教諭・保育士など）が参加することができるという点も評価できる。

すでに見てきたように、環境絵本においてはあとがきなど親へのメッセージが入り込んでおり、明らかな教育的意図がある。自然からのしっぺ返しや自然からの贈与の分配と交換、そして環境容量などについても学習できることが明らかになった。こうした内容は、子どもにとってだけではなく、読み語りをする大人にとっても環境教育の学習内容となるであろう。

さらには、環境絵本によって、自然との関係を教える原初的な契機がよってもたらされ、親子（あるいは子どもと保育者）の間のコミュニケーション行為が活発になることが予想される。

以上のような点から、環境絵本という教材は幼

児期の家庭における環境教育を切り拓く可能性が極めて大きいといえるだろう。絵本は直接的な幼児期における家庭での環境教育の契機となるのである。さらには、親がわが子のため環境絵本を制作するという行為によって、さらにそのような営みが実り豊かになるであろう。

## 6 2 既存型環境教育の再発見

二つ目の意義は、既存型の環境教育を再評価できるという点である。環境教育は二つのタイプ、すなわち「理念型環境教育」と「既存型環境教育」に分類できる<sup>12)</sup>。「理念型環境教育」とは、持続可能な社会を創るための教育の構想が練られて理念が提示され、その後カリキュラムや教材が開発されると、教育実践が活発になり持続可能な社会が構築できるという物語である。そうした物語は私たちを魅了する。

しかしながら、それが強調されすぎるあまりに、環境教育とは自覚されてはいなかったが、人知れず存在していた環境に関する原初的な「教え＝学び」、ないしはコミュニケーションが見落とされがちであるようにも考えられる。そうした原初的な環境教育のコミュニケーションの様相は、たとえば、親が子どもを散歩に連れて行くときに、動植物の名前を教えたり、昆虫をどうやって掴むかということや、身近な生き物とのかかわりを「教え＝学ぶ(模倣する)」ことになかにもある。

ただし、こうした「教え＝学び」は、意図的でもなければ万人に共通する経験でもない。きわめて偶発的で、個別的な体験である。そのために見過ごされがちであるが、子どもの前で親が自然や環境とかかわる姿を見て、子どもがそれを見様見真似で同じことを行うとき、そこにも環境教育が存在する。

環境絵本の意義は、幼児期や家庭での環境教育に目を向けるだけでなく、「既存型環境教育」を再評価する手がかりとなる点にもある。わざわざ環境絵本をもちださなくとも、普通の暮らしのうちに環境教育が存在することを思い出すきっかけとなる。その点にも環境絵本の大きな魅力が潜んでいる。

振り返ってみれば、1970年代に国際的政治の場で理念が提示されて出発した環境教育は、環境問題を解決するという教育目的を有していた。人工言語エスペラントを生み出してきたかのように、

専門家たちがその概念やカリキュラム、領域、指導方法などを提案してきた。実際、環境教育を主導的に普及させてきたのはさまざまな国際機関や学校であった。このような歴史的背景を踏まえて、国際的な場で生み出された理念先行型の環境教育だけが環境教育であると考えられがちである。

しかし、環境教育という用語が登場したからこそ、それと認識されるのだが、理念型の環境教育が登場するはるか以前から、家庭や地域の中で行われている環境にかかわる既存の「教え＝学び(模倣)」が存在していた。そのような「既存型環境教育」の発見が、環境教育全体に対する刺激をもたらすはずである。

## 6 3 「知」の受け渡しへの反省

さらに言えば、こうした「既存型環境教育」は、その内容もさることながら、それが受け渡しされる伝達方法においても、「理念型環境教育」にはない評価すべき点がある。最後にそのことについて述べてみよう。

おそらく、「環境に関する知識は、環境改善の実効力である」という命題は、自分自身の経験から、法則的にもおそらく十分説得力を有するものである。そこで、学校では、授業実践にあたって個々の教師が環境に関する知識である「学校環境知識」を選別し、体系化したりカリキュラム化したりして、子どもたちに「常識的」とであるとされる環境に関する知識を伝達して環境改善を期待する。この「学校環境知識」は、一方では地球全体の環境改善によって有用(有効)であるかどうかということ、他方では個人にとって有用(有益)であるかどうかによって、重宝されたり使い捨てられたりする。その際、有用性は科学的＝実証的な検証を経たりはしない。有用性に関する信仰の度合いが、当該の「学校環境知識」の応用力をも左右する。

一方では、有用あるかということばかりではなく、どのようにしてその知識を注入されたかという方法が、その知識の効用を決定づけ、その後の知識の保有の長さや応用の可能性に影響する。これは「学校環境知識」がどのような意味(意義)を有しているかという問題であると言い換えてもいいだろう。

「学校環境知識」は、あくまでも教師が期待する環境改善の実践に結びついており、教師の意図(教育目的)に敏感な子どもたちは、学校では先

回りして教師の発問や期待に沿えるような言動をおこすように見せかけることがある。しかしながら、「学校環境知識」が学校でのみ有意味であると見抜いた子どもたちは、おそらく、実生活ではそれを重視したり応用したりしないであろう。丸暗記しなさいと命令されて覚えた知識と同様である。

たとえば、次のようなやり取りで知識が伝達される。

教師「 を丸暗記しなさい! 」。

生徒「なぜ? 」。

教師「試験に出るから」。

こういった過程で丸暗記した知識が、ほとんど学校以外では有意味を持たないのと同様に、「学校環境知識」にもその有意味性が疑われることになるように考えるのは私だけだろうか。

子どもたちは「学校環境知識」の有意味性を軽視し、学校内でのみ通じるものとして捉えているかのように見える。その背景には、学校教育全体のダブルバインド的性格 すなわち、メタレベルではたくさん「持つ」ように「消費」できるようになりなさいと命令する一方で、「持たない」よう「消費を控えるよう」と命令しているがある。たとえば、「環境問題を解決するには個々人の消費量を削減すればよい」というのは、無用な知識ではないが、ほとんど無意味なのである。

「学校環境知識」と同様に、自然な過程で家庭や地域で教えられる自然環境に関する知識である「自然知識」に関しても、同じことが当てはまると批判されるかもしれない。しかしながら、家庭や地域社会では「自然知識」は有用である。

なぜなら、有用でない「自然知識」はすでに消滅しているはずだからである。たとえば実際に、自然の贈与を長期間にわたって受け取ることができる「教え=学び」(あるいは「自然知識」)であれば、その有用性は保証される。また、有意味でもある。というのも、その知識伝達の過程で情報の発信者と受信者の間のコミュニケーション自体が重要だからである。家をその家柄として存続させるような「家訓」が存在するのと同様である。

上述のように、「自然知識」が受け渡される家庭での環境教育は重要であり、その教材として環境絵本は非常に重要な位置を占める。家庭教育のなかで親子によって交わされる自然と環境に関する学びと教えだけではなく、地域社会にもそうし

たものがあつただろう。要するに、「学校環境知識」以外にも「自然知識」があるということを感じさせてくれる点でも環境絵本は意義深いのである。

以上のように、環境絵本には、親子での環境に関するコミュニケーションの契機となる点、既存型環境教育の再評価につながる点、知の受け渡しの再考契機になる点で、大きな意義があるといえよう。

#### 註

1) 井上美智子、「幼児期の環境教育普及に向けての課題の分析と展望」,日本環境教育学会,『環境教育』,Vol.14No.2.2004年,12頁。

2) 谷川俊太郎・作,元永定正・絵,『もこもこもこ』,文研出版,1977年。

3) 斎藤隆介・作,滝平二郎・絵,『花さき山』,岩波書店,1969年。

4) この点については,今村光章,「物語のなかの環境教育を求めて メカニカル=テクニカルな環境教育という物語」を超えて,矢野智司・鳶野克己編,『物語の臨界』世織書房,2003年,を参照されたい。

5) 監修 稲本正,文 滝田よしひろ,造形 矢野正,デザイン 森岡寛貴・やなぎゆうこ,『おばけのもーりーとまーち 森からのこえがきこえる?』,マガジンハウス,1998年。

6) 同上書,40頁。

7) 文・絵/有賀忍,長野県・信州豊かな環境づくり県民会議発行,『啓発用環境絵本 しぜんをまもる やさしいところガムッチおうじとどんぐりのき』,2002年。非売品。

8) むらたゆみこ,『もりのおくりもの』,橋本確文堂,2000年。

9) 文/吉藤正樹 絵/正木健二 プロデュース/谷口寿美子,『大きな玉子』,三和印刷所,2002年。自費出版。

10) 文と絵 堀田早苗,『じーじのおはなし』,旭出通信社,1999年。自費出版。

11) 立川涼ほか監修,『じいちゃんとぼくの海』,ポプラ社,1992年。

12) この点については,川嶋宗継・市川智史・今村光章編著,『環境教育への招待』,ミネルヴァ書房,2002年,を参照にされたい。

(なお、本研究は科学研究費補助金(平成16年度～平成18年度):萌芽研究「環境絵本を利用した保育・幼児教育における生活重視の環境教育にかかわる基礎的研究」(課題番号 16650174)の成果の一部である。)